

第7回世界集中治療と救急医療会議

中西一浩*

第7回世界集中治療と救急医療会議は、1997年6月29日から7月3日までの5日間、7月1日のカナダの建国記念日 Canada day をはさんで、カナダの首都オタワにあるオタワ会議センターにて開催された。オタワは、オタワ川に接し、国会議事堂をはじめとする官庁、研究所、文化施設等が計画的に整備された首都である。実際、足を踏み入れてみると、街の中心には運河が流れ、古い建築物と新しい町並みが調和した、緑と水の豊富な非常に美しい街であった。7月1日の Canada day には、エリザベス女王のパレード、国会議事堂その他で行われる式典・催し物等で街全体が多くの市民・観光客で賑わい、夜遅くまでお祭り気分には浸っていた。

6月29日、The Canadian Critical Care Society のホストにて、Opening ceremony と Welcome reception が行われ、5日間にわたる学術会議が開会され、翌30日より本格的な発表が始まった。会場はオタワ会議センターの10会場と Westin Hotel の2会場を使用し、主に北米、ヨーロッパ諸国、ブラジルをはじめとする南米諸国、日本・オーストラリアをはじめとするアジア・オセアニア諸国、イスラエルをはじめとする中近東諸国等、世界各国から集中治療・救急医療医学領域の専門家が多数参加した。会期中、24の Symposium、7つの Industry-sponsored symposium、30の Workshop と内容も盛り沢山に、集中治療・救急医学領域の様々な分野にわたる講演がなされた。一般演題は、192題の口述演題、512題のポスター演題が採用され、同様に幅広い分野の発表が行われた。Symposium は、主に呼吸器関連（機械的人工呼吸による功罪と最近の機械的人工呼吸法における

進歩・ARDSとNO等）、感染（sepsis の管理と抗エンドトキシン療法等）、中枢神経系（脳脊髄損傷と保護等）の病態生理と治療にテーマを絞り、その他にも心臓をはじめとする臓器機能障害、ICUにおける医療費抑制、臓器移植、TEE、栄養等のテーマの中から最近特に注目されているトピックがとり上げられ、活発な討議がなされた。Workshop も、できるだけその日の Symposium の発表の中から興味ある話題をとり上げる工夫がなされていた為、興味深く聴くことができ一層印象に残るものとなった。以下に筆者が参加したいくつかの session について簡単に述べたいと思う。

30日は「Ventilator Lung Injury」と題する Symposium があり、人工呼吸による功罪について、特に罪としての肺損傷の危険性・病理に関する発表がなされた。この Symposium では、第23回日本集中治療医学会の招待講演で来日された Prof. Didier Dreyfuss が再び人工呼吸器による肺障害 (volotrauma) について発表されていた為か、全体的にわかりやすく興味をもって聴くことができた。この分野の研究では今後、病的肺における、圧・換気量が肺組織障害にどのような影響をあたえるかについての多くの臨床研究が待たれるところである。その日の午後は「Advances in Mechanical Ventilation」と題する Symposium があり、Low Tidal Volume-High PEEP Ventilation, Liquid Ventilation 等の研究報告がなされた。7月1日の口述演題「Cardiovascular, General」の session では、新しい非侵襲的心拍出量測定法である Arterial pulse contour (COpc) の有効性についての発表がなされた。今学会では同様に本法の有効性を示す発表が数題みられた。又、心肺蘇生中の epinephrine 投与量 (high-dose vs standard-dose) を比較検討した The BRCT III study において、sodium

*日本医科大学附属病院麻酔科・集中治療室

bicarbonate の使用について再検討したところ、心肺蘇生が遷延した場合の sodium bicarbonate の使用時期に関しては、再検討の必要性があるという報告がなされた。遷延した心肺蘇生中に sodium bicarbonate を使用する timing に関してはまだ統一意見はなく、心停止の原因が心原性か非心原性かによっても sodium bicarbonate の使用に関して、相違があってしかるべきと考えられる。新たな trial を期待したい。同じく1日の「Infection, Nosocomial Pneumonia」の session では人工鼻と加温加湿器による病院内感染肺炎の発症頻度を比較した演題が2題出されていたが、両演題とも人工鼻では有意に発症頻度が低くなるという結果であった。最近、人工鼻の有効性を示す文献を散見するようになったが、筆者の勤務する施設でも人工鼻の有効性を検討したいと考えている。3日の「Cardiovascular, Septic Shock」の session では septic patients における酸素供給と組織酸素消費に関する演題が2題、septic shock 患者に対し NO

synthase inhibitor である L-NAME, 546C88, Methylene blue を使用した効果を検討した演題が3題あった。Methylene blue に関しては否定的な結果であった。

会期中の7月1日 (Canada day) は、会場周辺の交通も規制され、徒歩でしか会場へはたどり着く事ができず、大変不便な思いをした。その日は、参加者も少なく、会場内に何となく浮き足立った雰囲気を感じたのは筆者だけだろうか。学会の会期日程に若干の疑問を感じた。しかしその日の夜行われた Canada Day Party は街全体のにぎやかな雰囲気も手伝って大変盛り上がり、色々な国の医師達と友好を深めることができた。本学会には、日本人の参加も多く、多くの優秀な発表がなされていたが、今後集中治療・救急医療領域における、尚一層の日本人の活躍を強く期待したい。以上、簡単ではあるが第7回世界集中治療と救急医療会議の印象を簡単に書き留めてみた。